

琉球大学学術リポジトリ

〔COE研究員研究概要〕 琉球列島における魚類生息場としての海草藻場の役割

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2009-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 洋平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10090

— COE研究員研究概要 —

琉球列島における魚類生息場としての海草藻場の役割

中村 洋平(生態系の多様性研究グループ・2004年10月～2006年3月)

熱帯・亜熱帯域の沿岸浅所に発達する海草藻場(うみくさもば)は、サンゴ域やマングローブ林とならんで熱帯沿岸の景観を構成する代表的な要素である。海草は一次生産者として、また、枯死後の有機物提供者として機能しているだけでなく、魚類や無脊椎動物に棲息場所を提供するなど沿岸生態系において重要な役割を担っている。また、サンゴ域に棲息する幾つかの魚類が海草藻場を採餌場や稚魚の成育場として利用していることから、海草藻場とサンゴ域は魚類を介して密接なつながりがあるとされる。本研究では、魚類を介した琉球列島のサンゴ域と海草藻場の機能的な関わり合いを明らかにするために、奄美地方と沖縄地方と八重山地方の3地域における魚類の海草藻場利用パターンを潜水観察によって調べた。

調査は、2004年11月～12月、2005年5月～6月、8月～9月、11月～12月に、奄美大島の赤木名と赤尾木、沖縄本島の備瀬と恩納、および石垣島浦底と西表島網取で行った。各月において、各調査地の海草藻場とサンゴ域に、1m×20mのベルトランセクトをそれぞれ7本設定し、SCUBA潜水による目視観察でランセクト内に出現した各魚種の個体数と体長および行動様式を記録した。

調査を通して、合計23科62種の魚類が海草藻場で確認された。各海草藻場で観察された魚類の総種数は、どの調査地でも30種程度と大きな違いは認められなかったものの、個体数には地域による違いが認められ、奄美地方は沖縄地方や八重山地方に比べて明瞭に少なかった。地域によって海草藻場の魚類相に違いは認められたものの、どの魚類群集も下記のような4グループによって構成されていた。(1)周年定住種；周年、海草藻場だけで生活する魚類(図1)、(2)季節定住種；稚魚期を海草藻場で過ごし、成長するとサンゴ域に生息場所を移行する魚類(図2)、(3)一時来遊種；

海草藻場を採餌場の一部として利用する魚類(図3)、(4)偶来種；偶然に海草藻場に来遊した魚類。また、奄美地方から八重山地方に南下するにつれて、海草藻場を採餌場や稚魚の成育場として利用するサンゴ域魚類の種数や個体数が多くなる傾向が認められた。



図1. 周年定住種のフチドリカワハギ



図2. 季節定住種のタテシマフエキ



図3. 一時来遊種のヒメジ類

本研究の印刷物

Nakamura Y. and Tsuchiya M. Spatial and temporal patterns of seagrass habitat use by fishes at the Ryukyu Islands, Japan. *Estuarine, Coastal and Shelf Science*, 76 (2):345-356 (2008)

遺伝子の多様性
研究グループ種の多様性
研究グループ生態系の多様性
研究グループ

活動報告・その他

